てふてふ　シーズン　六　（令和六年）

秋空の　暮れ急げるも　いろ豊か　14
天空の　湯船に流す　暑さかな　18
紅葉映え　色なき風に　彩染める　18
彼岸花　ときをたがえず　緋を燃やす　20
曇天に　名月かすみ　恨み酒　21
遠太鼓　祭り近しと　精が出る　16
秋晴れや　枝葉揺れてる　優しげに　22
天を航く　カラス小さき　秋の空　25
いざ競え　太鼓のバチに　虫の鈴　24
朝日浴び　赤み増したる　紅葉咲く　24
落ち葉掻き　生きていてこそ　風物詩　24
寒雨去り　重き空気に　朧月　19
雲あれど　いとわず射ぬく　月冴えて　19
惜別も　今はもう秋　高き空　25
秋深けて　か細き虫の音　涼にしむ　16
落ち葉踏む　軽きリズムの　千鳥足　29
雲海を　風を頼りに　月渉る　23
秋深し　名残りを競う　虫の声　25
錦秋の　彩おぼろ　宵下がり　22
ハイネ詠む　俄か仕込みの　文化の日　40
つむじ風　枯葉のダンス　くるりカラカラ　25
見渡せば　重く冷たい　冬の色　28
葉を落とし　冬木の芯は　空を向く　27
我は好き　酔って夜寒に　一人座す　21
瞼透く　陽だまり温き　日向ぼこ　29
年の瀬や　始業チャイム　ゆたりと流る　28
寒去りて　青空見上げ　機影追う　21
風凪いで　暗き寒空　雲重し　25
おお寒や　布団の中の　春憩う　26
モンキチョウ　ごとく舞い落つ　欅の葉　24
灰色が　寂しさ足して　冬模様　45
嵐去り　寒気に集う　濡れ落ち葉　23

風凪いで　山水懸かる　寒の宵　20
立冬に　木枯らし一番　就いてくる　23
湯煙に　けむる枯萱　鄙び宿　35
柚子かけて　香り友とす　一人膳　36
枯れ薄　昭和は遠く　なりにけり　33
温暖化　出番戸惑う北下ろし　28
北風を　顔で受け止め　心研ぐ　28
12月　新調の橋　濡れており　21
散歩道　枯れ葉を連れに　サクサクと　23
膨らみと　温さ嬉しき　鯛焼きよ　28
初化粧　うれしはずかし　山眠る　27
遠火事に　サイレン淡く　夜寒かな　29
蒟蒻玉　手に透ける月　水鏡　20
冬銀河　寒天に冴え　世を諭す　26
小粋かな　カフェ仕立ての　焼き芋屋　30
荒星に　煌めく宇宙　時空超ゆ　26
裸木を　まちまち射貫く朝日かな　20
寒鴉　競わず並び　群静か　23
核なき世　願い繋がる　この師走　30
静寂に　円月冴えて　息つむぐ　25
風冴ゆる　冬空青く　雲急ぐ　26
冬の庭　藪柑子ふる　毋忍ぶ　21
史実にも　諸説あるとや　吉良浅野　22
湯煙や　赤い手ぬぐい　肩掛けて　28
朝日浴び　星散るごとくや　野辺の霜　29
身をゆだね　雪吊尖り　月近し　22
水鳥の　声さえ渡る　朝の霜　29
ガサガザと　鮫肌ごとき　乱れの世　28
置き炬燵　にわか達磨を誘い入れ　24
オリオンの　懸かる凍天　光絶ゆまず　18
短日の陽　斜めに部屋を横切れり　33
冬椿　あの角超えて回り道　42
客去りて　一人居となる　日短し　40
熱視線　蚤の心臓　要毛皮　23

柚子揺れて 湯気に香りの　冬至かな　20
今日よりは 春を呼ぶ日や　冬至かな　22
寒柝や 響き途絶えて　冬の街　29
ストーブや 灯火揺れて　冬籠り　20
はんなりと 陽気を浴びて　裸木光る　22
光吸う 靄に溶けゆく　冬景色　26
初雪や 跳ねて駆けゆく　子らの声　20
初雪や 新調の橋　ひそと濡れ　23
小雪舞う 鳥声張る 白き朝　17
聖夜劇 星降る夜の　初舞台　30
お湯割りの 湯気にほころぶ　冬の膳　29
端役なり 引き当てしかり　聖夜劇　24
冬枯れて 隅に灯れる　色一つ　20
聖夜晴れ 星に祈りて　ルミナリエ　24
肌で知る時空の歪み年の暮れ　27
歯朶刈の 手の裏表　森収む　16
背に寒し 歳末商戦　ぽちりミス　19
独り身を 長湯に溶かし　年忘れ　52
ごうひちご 指折り詠んで　年おさめ　37

一級到達　85句　いいね　計2159　平均25.4　最大52　最小14

てふてふ　シーズン　七　（令和七年）

初夢や　富士の高嶺に　なす縁　15
空青し　人波くねる　初詣　23
書初めや　筆の行方に　遠き日々　23
ごまめかな　小に秘めたる　妙の技　18
老いの身に　灯るほのかさ　初春や　18
お年始の　孫らの名残　置き土産　30
寿春に　対の白鷺　朱け空に　25
初暦　刻む足跡　寧けらし　17
地球とて　いつかは止まる　独楽仲間　28
新海苔や　能登の朝市　風美味し　26
米騒ぎ　願い下げにと　餅の花　27
雪晴間　ソフトの甘さ　ほほに溶け　15
寒月の　冴えたる空に　想い馳せ　19
凍雲に　水面翳りて　魚眠る　28
冬空に沈む気色や春遠し　26
白梅の　愛らし蕾　春隣り　30
蝋梅や　清しき色に　香り添え　29
大寒や　明けに供えり　終い菊　31
寒ゆるみ　手足のびのび　朝寝坊　29
星屑や　野辺まで散りて　霜の朝　41
母偲ぶ　深き皺　冬日影　26
春日和　遠き雲間に　光射す　28
冬苗　紫山子佇む　苅田跡　23
子ら皆が　カラスと帰る　冬苗　35
寒雀　斜め日浴びて　影長し　32
雪と風　織りなし築く　樹氷林　32
陽を食みし　小さき芽吹き　春を待つ　26
花よりも　雪見大福　茶の香り　35
吼える風　足音遠し　探す春　29
鬼は内　渡る世間に　和む縁　35
空の青　池に映して　春立ちぬ　33
白魚や　水に溶けゆく　淡き恋　24

ままならぬ　風に舞い散る　春の雪　28
干し海苔の　鳴く音澄みて　冬日和　27
ままならぬ　時にあらがう　春の雪　28
切なさや　心の襞の　薄氷　27
紅梅に　雪の一片　露と消え　22
山の湯や　湯煙白し　春の雪　27
巡りくる　春のぬくもり　待ちわびる　25
元号を　掛け替え祝う　建国日　28
残雪の　深き沈黙　遅き春　30
初音聞く　楽しみ先に　鶯餅　25
柔肌に　えくぼ愛らし　鶯餅　31
畔焼や　上がる歓声　子ら群れて　27
今どきは　バレンタインに　義理不要　32
鬱々と　不機嫌宿り春寒し　32
余寒なほ　凛と咲きたる　水仙や　34
学び舎の　門出に誓う　すみれの児　23
学び舎の　巣立ちに歌う　菫の娘　27
鳴かぬなら　佐かしてみたし　田螺汁　28
東雲に　新芽の背伸び　末黒野　36
冴返る　緑き芽吹きに　唱入る　27
冴返る　陽だまりに鳩　寄り合いぬ　35
春の雨　微睡みの午後　レモンティ　28
鳥たちも　濡れていこうと　春の雨　36
鳥影が　水墨と化す　春障子　36
春障子　べらぼう歌舞伎て　艶話　30
畳目に　陽気挿しいる　春障子　29
タンポポに　昔の名前　鼓草　30
たんぽぽを　摘む子愛おし　風やさし　32
目刺し食む　尾頭付きと　見え張って　35
寒暖が　入れ替わりてや　ミモザ咲く　28
東風うけて　相撲幟が　はためけり　41
あち東風で　花粉舞い飛び　マスク売れ　20
春の夜半　月影揺らす　嵐かな　28
雨捌けて　春夕焼けに　空笑う　20

流し雛　清き流れに　たよたふと　39
過去未来　全てを込めて　雛流して　35
春の鳥　一羽根伸ばし　空の旅　33
木々芽吹き　鳥声高く　花香る　26
霞立ち　山並みおぼろ　春うらら　25
俳句道　心耕し　詠みを鋤く　35
残雪に　苗映ゆなり　富士の嶺　37
水温む　釣り人戻る　池の端　31
百千鳥　指揮者佐かせの　ポリフォニー　29
忘れたい　忘れてならぬ　震災忌　32
見上げれば　微笑み返し　春の空　32
お水取り　夜空を焦がし　厄祓う　31
あの角に　紫木蓮あり　回り道　35
遅れ来ぬ　天より便り　淡き雪　36
淡雪や　ぬれて行くなり　半平太　24
涅槃会や　令する読経　渦と巻く　27
想うまま　我もなりたや　春の海　34
平和ボケ　牛の涎や　春の海　23
腰伸ばし　仰ぐ陽ざしや　蕨採り　41
春愁や　蓮の匂ひに　気を奮う　26
一人居や　達人ならず　余寒なほ　29
笹桜　身を尽くせよと　蓬餅　25
春色に　光あふるる　彼岸かな　26
墓清め　心鎮まる　彼岸なり　32
手を添える　第二ボタンや　卒業歌　34
潮騒の　旋律運ぶ　春の海　33
連翹や　一球入魂　夢追って　20
春の塵　免許返納　思案中　29
あな憎や　敵ははたき　春の　26
てふてふや小灰蝶やら　アゲハやら　27
小灰蝶　花のベッドは　キングなり　20
君子蘭　花芽のぞきて　咲くを待つ　27
永き日を　のたりのたりと　舟をこぐ　28
庭掃除ラジオ流るる日永かな　34

引鶴の　旅路はるけし　無事願う　35
さよならは　出会いの始まり　鶴発ちぬ　23
春の日や　ひとり佇む　花の影　28
ふるさとや　山朧なり　人やさし　32
巣を焼かれ　行くあてもなし　戻り蜂　30
行く先に　愉しみ残し　初音聴く　30
町の子ら里の子集め　芋植る　22
幸せを　ふと覚ゆるや　復活祭　22
春愁や　野に生く草に　名のあらん　29
目に桜　青き鶯　初鰆　21

一級到達　110句　いいね　計3143　平均28.6　最大41　最小15